

目標：540kg/10a、1 等級比率 95%以上、
玄米タンパク質含有率 6.0%

「丈夫なイネ・うまいコメづくり」の実践で 高品質米の安定生産を実現しましょう!!

丈夫なイネづくり ～初期生育（良質茎）の確保～	うまいコメづくり ～後期栄養の確保～
1 異常気象に対応した土づくり 2 健苗育成と適期田植え 3 土壌等、環境条件に合わせた栽植密度 4 適期溝切り、適期中干し	5 上手な穂肥活用で稲体活力を維持 6 水分補給で登熟向上 7 適期刈取りとていねいな調製

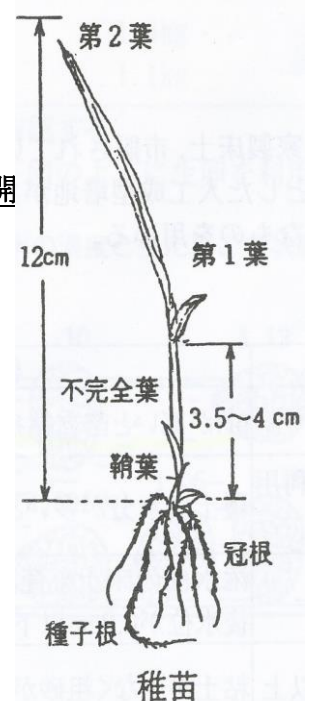
育苗後半、田植え、初期管理のポイント

1 良質苗への総仕上げ

(1) 育苗期間後半（硬化期）の温度管理

- 日中はハウスを全開にして十分外気に慣らし、苗の徒長を防止しましょう。
- 田植えの1週間前からは、低温・降霜時を除き、夜間もハウスを開き外気に慣らしましょう。
- かん水は、苗の様子を見ながら、過湿にならないように1日1回午前中に行いましょう。
- なお、硬化期の後半は、1～2回（2回目は午後の早い時間）行いましょう。
- 夕方のかん水は床土の温度を低下させるため控えましょう。

育苗段階	終了段階の生育めやす	温度管理		処理日数
		昼間	夜間	
緑化期	第1葉鞘長 3.5cm	20～25℃	15～18℃	3日程度
硬化期	苗丈 12cm、葉数 2.0葉	15～20℃	10℃以上	12～14日



2 弁当肥で苗の活力を高め活着促進

- 苗の老化防止と田植え後の活着を早めるため、弁当肥を活用しましょう。
- 田植4～5日前に窒素成分で1箱当たり1～2gの追肥を行いましょう。（ただし、軟弱苗や徒長苗には施用しない）



◇徒長苗にしないポイント！

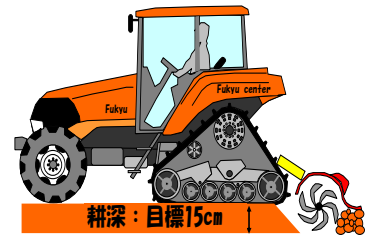
- ①ハウス内を高温にしない → 十分に外気にあてる
- ②硬化期は被覆しない → ただし、降霜が心配される時は被覆する。
- ③かん水量は多くしない → かん水は1日1～2回

3 適正な基肥施用による「丈夫なイネ」づくり

- 基肥チッソ量は、1回目の穂肥を施用できる稲になるように調節しましょう。
- 基肥施用後は、肥料成分の流亡を防ぐため**1週間以内に入水しましょう**。(全層施肥)
- 土壤改良資材を活用し、積極的に土づくりを進めましょう。

4 耕うんは「15cm」を目標に実施

- ワキの発生抑制、耕深の安定化に向け、耕うんは可能な限りほ場が乾いてから実施しましょう。
- 耕深の安定化を図り根の分布を広げるため、耕うんは低速で実施しましょう。



5 適期田植え～早くても連休後半の好天日に実施～

- 早植えは生育過剰となり細莖化による倒伏や籾数過多による米の充実不足を招きます。
- また早植えは出穂期が早くなり、高温条件下での登熟となるため、乳心白粒等の多発生による品質低下を招きます。

6 早期目標莖数の確保に向けた栽植密度の設定

- 1株3～4本植えとし、栽植密度は品種・栽培条件に応じ60～50株/坪にしましょう。
- 早生品種や初期生育をとりにくい地域では、栽植密度を60～70株/坪としましょう。

7 田植後の水管理で初期生育促進

- 活着するまでは3～4cmのやや深水で管理し、低温や強風による植え傷みを防止しましょう。
- 活着後は2～3cmの浅水管理で水温の上昇を図り、初期分けつを確保しましょう。

8 除草剤は早めの散布を心がけ、遅れずに散布する

- 初期剤を使用する場合は移植前処理を避け、移植時又は移植後に使用しましょう。
- 散布適期を逃さないよう、早めの散布を心がけましょう。
- 散布時の水深は3～5cm程度を確保しましょう。
- 除草剤の処理後7日間は止め水とし、4～5日間は湛水状態を保ちましょう。
- 使用に当たっては、製品のラベルに記載されている使用基準や注意事項、使用方法をよく読み、内容を遵守して使用しましょう。

9 新之助研究会の方へ～新之助栽培のポイント～

- 初期生育により良質茎を確保するため、健苗を育成しましょう。
- 田植は、5月中旬に行いましょう。
- 前年と作付け品種が異なるため、漏生籾対策として除草剤の体系処理や生育期間中の条間・株間の稲株を抜き取りましょう。
- 葉いもち防除を、育苗箱施用又は水面施用により**必ず実施**しましょう。